

2 章

古代における武技

日本の古代社会は、武力で人民を治めたのではなく信仰を統括して人々を治めていたようである。古代とは一般に大和朝廷の時代から奈良・平安時代まで（300 年頃～ 794 年）をいう。神の前で舞うことにより神と交信をし、災禍を払いのけ五穀豊穡をもたらして人民を治めたのである。

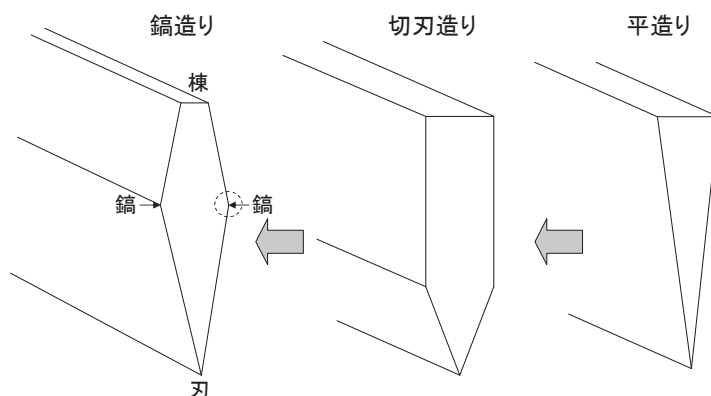
原始宗教の一つにシャーマニズムがある。それは、厳しい修行を積んだシャーマン（巫女・呪術師）が神と交信し、吉凶の判断や予言などを行う時に祭事に使ったのが武器であった。この時代に最も大きな集団を統率して力を持っていたシャーマンが天皇であり、天皇は祭りを催して人々を束ねていったのである。この祭事（まつりごと）が政（まつりごと）になり、現代にまでつながっているといえる。

●古代の刀剣

このことを当時の刀剣について見てみよう。刀剣を含む金属器は紀元前三世紀末、日本でいう弥生時代初期に、中国から朝鮮経由で日本に伝えられた。一般に刀剣と言われるが、片刃のものを「刀」といい、両刃で真っ直ぐなものを「剣^{つるぎ}」と違って区別した。

中国から金属器が伝えられると、剣は祭事の道具（祭器）として主に使われ、信仰の領域で神々の象徴として機能した。一方、刀は中国式の直刀でありその機能はまだ不十分であった。皇位のしるしとして歴代の天皇が受け継いだとされる三つの宝物を「三種の神器^{じんぎ}」というが、その中の一つに天皇が使った祭器としての剣があり現代まで伝えられている。こうした点で、古代における「武」は「武は舞である」という意味として機能していたといえるだろう。

やがて「大化の改新」（645 年）により、律令制度（刑法及び行政法）が確立し兵制が定められると、中央に衛府を地方には軍団を置き辺境の防備に当たらせた。衛府の衛士も地方の軍団も



資料3) 刀身の断面図（酒井利信『刀剣の歴史と思想』日本武道館）

農民の徴兵によって交代制で勤務し、彼らは弓矢や刀剣、馬を操る技術が要求されたのである。

こうして「大化の改新」以来、武備も充実し武技の訓練も行われたが、これらは遣唐使によって輸入された唐の制度や技法の模倣に過ぎなかった。またこの頃の武技とは、ほとんどが馬に乗って弓を射る騎射^{きしや}を意味し、刀剣は補助的なものにすぎず、操作法も平造りで直刀であったことから片手で相手を突くか、振回してたたき殺すなどの単純な技術であったのである（資料3）。

律令国家から貴族政治へと続く奈良・平安時代には諸制度が次第に整備され、伝承で行われていた行事も儀式として制度化されていく。なかでも宮廷において、季節の変わり目に行う行事として三度節^{じやらい}（射礼節、騎射節、相撲節）が生まれる。この中には弓や相撲などの武技が含まれていたのである。

●鹿島神宮と国宝の刀

神代の昔、天照大御神^{あまてらすおおみかみ}の命を受けた武甕槌大神^{たけみかづちのおおかみ}は、香取神宮の御祭神である経津主大神^{ふつぬしのおおかみ}とともに出雲の国に向かい、国譲りを成就し、日本の建国と建設に挺身された。とりわけ東国における神功はきわめて大きく、関東開拓の礎は遠く大神にさかのぼる。

神武天皇は御東征のなかばにおいて思わぬ窮地に陥られたが、大神の「^{ふつのみたまのつるぎ}節 霊 剣」の神威により救われた。この神恩に感謝された天皇は自らの御即位の年、大神を鹿島の地に勅祭された。

『常陸国風土記』によると、649年に神郡が置かれ、天の大神の社（鹿島）、坂戸の社、沼尾の社、3社をあわせて「豊香島の宮」と名づけ、崇神天皇の時に太刀や弓などの武具が奉納されたと記されている。武具の奉納から、この神が武神として信仰されていたことがうかがえる。

鹿島神宮宝物館には、国宝の金銅黒漆平文拵^{こんどうくろうるしひょうもんこしらえつけたりかたなからひつ}・附刀唐櫃があり、日本最大の直刀で、制作年代は今から約 1,300 年前と推定される。『常陸国風土記』に、慶雲元年、国司等が鹿島神宮の神山の砂鉄で剣を作ったとあり、その剣であろうといわれている。古くは本殿内に収められていた神刀で、御祭神の^{ふつのみたまのつるぎ}神剣節霊剣の名も伝えられている。



重要文化財 本殿（鹿島神宮蔵）



国宝「直刀」金銅黒漆平文拵・附刀唐櫃（鹿島神宮蔵）

●三度節（射礼節、騎射節、相撲節）

まず射礼節であるが、中国・周代（～紀元前 256）において君子が学ばねばならなかった六^{じやらい}芸^{りく}として、礼、楽、射、御（馬を操る）、書、数があった。その中でも「射は観徳の器」（『礼記』）といわれ、射には実利的な技を重視するのみならず、道徳的精神・礼を重んじる性格があった。日本でもこの思想の影響を受けて、宮廷行事として射礼という弓射が取り入れられた。射礼は正月のめでたい行事として、1月15日～18日にかけて宮中に射場を設け大射^{ほしや}を射る歩射であり、礼にかなった節度ある姿勢が求められたのである。

次に騎射節であるが、中国では5月は悪月とされ、特に5日には菖蒲酒を飲み競漕をして邪気を払う行事が行われた。こうした風習が日本に入り、5月5日には不吉を払うため官人により馬場殿で騎射が行われた。騎射は、馬に乗りながらコースの3カ所に懸けられた的を射るものであった。弓や馬は古くから狩猟用・戦闘用として用いられたが、中国の影響や武器の玄妙さから、貴族文化の中に儀式として採用されたのである。

相撲は、7月7日の七夕の頃に、1年の前半期の農作物の収穫を祝い後半の稲作の豊作を神に祈る目的で行われ、宮廷でも年中行事として行われた。相撲節は天平6（734）年、聖武天皇の頃から始められ、全国から体力の優れた相撲人を集めて天覧の元で行われた（資料4）。

相撲の勝負は立合いの合図で開始され、土俵が無いため寄り切りや押し出しはなく、手をつき膝をつかせることで決着がついた。相撲は勝ち負けだけではなく、農作物の豊凶を占う「年占」としての意味が強かったのである。現代の相撲でも、力士は正々堂々と戦うということで裸で行い、清めの塩をまき、土俵上で四股を踏み地下に潜む邪悪な神（醜）を踏みつぶすなどの行為も、神事であるからである。

こうしてみると、古代の武技は護身や戦技だけではなくたといえる。紀元前から刀剣の剣は祭器として使われ、やがて貴族は年中行事として弓射や相撲を行い、五穀豊穡や無事息災を祈る儀式として行われた点に特徴があったのである。



資料 4) 相撲節の絵図 『柔道百年の歴史』(講談社)